

日本人に多く 胃の粘膜から広がる

部位別に見たがんのうち、国内における罹患者数・死亡数ともに多いのが胃がんです。

胃がんは胃の最も内側の粘膜で生じ、進行に伴い粘膜下層、固有筋層と胃壁内へ広がり、最終的には他の組織へと転移していきます。

主な原因は2つ。最も多い理由がピロリ菌の感染ですが、衛生環境の整備や除菌療法の普及により、近年は減少傾向にあります。一方、増加傾向にあるのが逆流性食道炎を要因とする食道胃接合部がんです。食生活の欧米化による肥満の増加を背景に、胃液が逆流して胃と食道のつなぎ目が傷つき、がんを発症します。

早期では症状が出ること

機能温存手術も広まる

胃がん

ピロリ菌感染、逆流性食道炎を原因とする患者数の多い(罹患者数2位、死亡数3位)がんです。内視鏡検査による早期発見や機能温存手術も広まっています。



解説

がん研究会有明病院
胃外科部長

布部 創也

ぬのべ・そうや ●1996年、熊本大学医学部卒業。
京都府立医大第2外科入局。都立駒込病院、東京大学大学院医学系研究科消化器外科を経て、2010年よりがん研有明病院。2019年より現職。

は、ほとんどなく、自覚症状が現れる頃には、ある程度進行していることがあります。

検査方法としては検診などで行われるバリウムを用いた胃のX線検査が従来行われていましたが、現在は口や鼻から胃に通したカメラで粘膜を直接確認する内視鏡検査が広く普及しています。内視鏡検査では病変が粘膜に留まるような、ごく早期の病変も発見できます。発症が増えてくる40歳以降であれば、一度は内視鏡検査を受けるのが望ましいでしょう。その有用性から自治体検診などにも徐々に取り入れられてきています。また検診だけでなく、1週間以上続く痛みや、食前食後に必ず痛みを感じるなど、胃の異変を感じたら内視鏡検査を受けることをお勧めします。

疾患の特徴

- + ピロリ菌や逆流性食道炎を原因とする
- + 日本の罹患者数、死亡者数ともに多いがん
- + 標準治療の開腹手術とともに、腹腔鏡手術も広まる
- + 内視鏡検査で早期発見が可能

